

李白女性詩訳注稿 I

寺尾 剛

〔凡 例〕

一、本稿は、唐代詩人の中にあつて、とりわけ数多くの女性詩を残した盛唐の大詩人・李白の、女性を題材・素材にした詩篇を細大漏らさず取り上げ、校語・訳注を施し、唐代女性詩の実態を明らかにする一助とならんとを願つて編集した。

一、底本としては、現在最も普及している清の王琦注による『李太白全集』（中華書局版、略称『王琦本』）を用いることにする。文字の異同（「校語」）に関しては、主として『静嘉堂蔵宋本李太白文集』（略称、『宋本』）、『分類補注李太白詩』（「許本」を参照、略称『分類補注本』）、『李詩通』、『仿宋咸淳李翰林集』（略称『咸淳本』）、

『文苑英華』、『唐宋詩醇』、『全唐詩』等を参照した。

一、今人の手になる李白の全集には、久保天随『李太白詩集』（統国訳漢文大成、一九二八年）、大野実之助『李太白詩歌全解』（早稲田大学出版部、一九八〇年）、瞿蜕園・朱金城『李白集校注』（上海古籍出版社、一九八〇年）、安旗主編『李白全集編年注釈』（巴蜀書社、一九九〇年）があるが、これらも適宜参照した（「テキスト」の項には、これらの頁数を明示した）。

一、「韻字」については平水韻に準拠した。

一、「語釈」については、主として、王琦の注を取り入れたが、その際、可能なかぎり原典調査を行い、調査できなかったものについては、その旨明示した。原則として、唐以前の詩歌については遠欽立編『先秦漢魏晉南北朝詩』（略称『先秦漢魏』）、文については嚴可均編『全

上古三代秦漢三国六朝文」(略称「全上古」)を参照し、
『文選』に収められている作品については、特に『文選』
に準拠することにした。

一、解説中の人名については、すべて敬称を省略した。

一、今回は『李太白全集』巻二十五の「閨情」の部分
から、「寄遠十二首」に校語・訳注を施した。『李白歌詩
索引』の作品番号で言えば、936番から947番まで
に該当する。

※本稿は愛知淑徳大学国文科中国文学演習Ⅰ(三年次)の授
業で行なった研究成果に依るところが大きい。労苦を厭わ
ず丹念に資料調査を行なった学生諸君に謝意を表したい。

0 寄遠十二首

1三鳥別王母

遠きに寄す十二首
三鳥 王母に別れ

2 銜書來見過

書を銜んで 來たりて過ぎらる

3 腸斷若剪絃

腸の断つこと絃を剪るが若し

4 其れ愁思何

其れ愁思を如何せん

5 遙知玉窗裏

遙かに知る 玉窓の裏

6 織手弄雲和

織手 雲和を弄するを

7 奏曲有深意

曲を奏して 深意有り

8 青松交女蘿

青松 女蘿を交ふ

9 寫水山井中

水を写ぐ 山井の中

10 同泉豈殊波 泉を同じくせば 豈に波を殊にせん
11 秦心與楚恨 秦心と楚恨と
12 皎皎爲誰多 皎皎たり 誰れか多きと為さんかは

【テキスト】(十二首全体について)『李太白全集』二五、
『靜嘉堂藏宋本李太白文集』二四、『分類補注李太白詩』
二五、『李詩通』十三(五言詩九首)・二〇(長短句二首、
「其十一」は巻四「樂府詩」の「長相思三首」の第三首
目に収める。これは唐人選唐詩集である『又玄集』に「長
相思」とあるのに基づく)、『仿宋咸淳李翰林集』二〇、
『唐宋詩醇』巻八(但し「其六」「其九」「其十」のみを
収める)、『全唐詩』一八四(但し「其十一」は巻一六五
の「長相思」の第二首目に収める)、久保天随『李太白
詩集』下巻(p.642-658)、大野実之助『李太白詩歌全解』
(P.140-141、P.146、P.136)、瞿蛻園・朱金城『李白集校注』(P.
146-147)、安旗主編『李白全集編年注釈』(p.225-235)
「開元十九年、李白三十一歳」の項。

【校 語】

0 寄遠十二首 『全唐詩』は「寄遠十一首」に作る。

2 見 『全唐詩』は「一作相」と注する。とすれば、「相」
は「すき」「ふい」の意で、文意が通じない。「咸淳

本」は「相」に作り、「一作【見】」と注する。

3 絃 【全唐詩】は「弦」に作る。

4 思何 【咸淳本】はこの句の下に「一本無此二句」と注する。

5 窗 【宋本】は「牕」に作り、「分類補注本」【李詩通】は「牕」に作る。

9 山 【宋本】【咸淳本】【李詩通】は「落」に作る。【王琦本】は「繆本」作「落」と注する。

【詩型・韻字】

五言古詩。過・何・和・蘿・波・多（歌韻）

【語 釈】

0 寄遠十二首 遠くにいる妻に寄せた詩を十二首を集める。「寄遠」というタイトルは、李白以降、許渾・白居易・賈島・李商隱・杜牧・陸龜蒙といった、著名な唐詩人たちの作品の中にも見え、ほとんどが遠くにいる妻（あるいは女性であるところの恋人）に寄せたものである。唐以前には、管見のかぎり、このタイトルは検出できないが、艶治な宮体詩・閨情詩が流行していた六朝時代に、この種のタイトルの作品が存在していた可能性はある。ただ現段階では、

李白のこの作品が濫觴と言わざるをえない。ちなみに、宋の郭茂倩『樂府詩集』巻九四「新樂府辭五」は、「寄遠曲」と題して、中唐の王建・張籍の二人の作品を挙げている。やはり遠くにいる女性を歌ったものである。李白のこの十二首は、おそらくは一時に成ったものではないと考えられるが、長江中流域のいわゆる「楚地」（現在の湖北・湖南・四川東南部）の地名が頻出するので、彼の安陸（現湖北省時代（二十代後半から三十代）の作品を集めたものと推定される。当時、彼は初唐期の宰相・許圜師の孫女と結婚していた。「寄遠」諸作に登場する女性が、概ね高貴な婦女を連想させるのも、そのためであろうと考えられる。

1 三鳥 【王琦本】に「三鳥、三青鳥。西王母ノ使也。」とある。三羽の青い鳥。『山海經』の「西山經」「大荒西經」等に見える。唐詩にしばしば用いられ、主に①仙界からの使者、②手紙を運ぶ使者（飛脚）等に喩えられる。「青鳥」とも。

王母 西王母のこと。崑崙山に棲む仙女。ここでは妻に喩える。この詩において、李白は妻を神秘的かつ高貴な女性に設定している。

2 見 尊敬を表す。

3 剪絃 (弦楽器の) 弦が切れること。南朝・宋の鮑照

の「傷逝賦」(四部叢刊本「鮑氏集」卷二)に「盡ケルコト

若ク窮煙ヲ、離ルコト若シ剪絃ノ」とある(但し「全

上古」は「剪絃」を「箭弦」に作り、「初学記」卷

十四は「剪」を「斷」に作る)。

5 遙知 以下四句は、妻の心情を想像する。

玉窗 玉で飾ったような美しい窓。梁の簡文帝「傷美

人、又三韻」に「何レノ時カ玉窗ノ裏、夜夜更ニ

縫ハン衣ヲ」とある。

6 纖手 細く美しい女性の手。李白の好んだ表現。

雲和 小型の琴の一種。「旧唐書」「音樂志」に「如シ

箏ノ稍小ナルヲ曰フ雲和ト。」とある。なお「王琦本」

は「文献通考」「樂考」の「雲和琵琶」の説明を引

用する。

8 青松交女蘿 「女蘿」は地衣類の一種。「詩經」にも見

える。ヒカゲノカヅラ、サルオカゼ。松などにぶら

さがつて、寄り添うように生えるため、しばしば男

にたよろうとする女心に喩える。李白の「去婦詞」

にも「女蘿附ク青松ニ、貴レ欲スルヲ相依リ投ゼント」

9 寫水「写」は「瀉」に同じ。この二句は、久保天隨・

大野実之助ともに、山の井戸に二種類の水を注ぎ込

むとき、その水が同じ泉から湧き出しているのであ

れば、清らかさも同じであるから、井戸の中で異な

る波を立てるはずはない、という方向で解釈してい

る。ただ、両者とも、その根拠なり出典を明示して

いない。おそらくこの部分、南朝・宋の謝惠連の「代

古」(「先秦漢魏」宋詩卷四、「玉台新詠」卷三等)

に見える「瀉レ酒ヲ置ケバ井中ニ、誰カ能ク辨ゼン斗升ヲ。

合スルコト如ク二ケンノ杯中ノ水一、誰カ能ク判タン淄澠ヲ。」

(「酒を井へそそぎこんだらだれが水と酒の分量が

わかるうぞ、二つ合せて杯の中の水のようにしたら、

だれがそれが溜水の水か澠水の水かわかるうぞ、ふ

たりの仲はその井の水、その杯の水の様なものだ。)

↓鈴木虎雄訳解「玉台新詠集」上(岩波文庫、一九

五三年)による)に着想を得たものと思われる(ち

なみにこの詩句も「列子」「説符」の白公と孔子の

問答を踏まえる。「通釈」では「山井」中の水と「泉

を同義のものとして、先行の二翻訳とは、若干異なっ

た解釈をすることにした)。

10 秦心與楚恨 「秦」は現在の陝西省、特に長安(西安)

一帯を指す。「楚」は現在の湖北省・湖南省一帯を

指す。以下二句について、久保天隨・大野実之助と

ともに、秦人と楚人の人情は異なっていて相容れない

が、我々二人の気持ちには相通じ合っている、といった方向で解釈している。しかし、「秦心」「楚恨」は、そこまで屈折して解釈する必要はなく、そのまま、「秦」「楚」にお互い離れ離れになってはいるが、「秦」にいる私（あるいは君）の心」と「楚」にいる君（あるいは私）の恨み」には、いずれも強いものがある、といった方向で解釈するのが穏当であろう。ちなみに、この詩が李白の最初の妻・許氏のことを歌っているとすれば、彼女は安陸にいたので、「楚恨」は妻の方を指している可能性が強い。安旗主編『李白全集編年注釈』は、「白時^ニ在^リ長安^ニ、許氏^ハ在^リ安陸^ニ、故^ニ云^フ。二句謂^フ兩地相思^フコト正^ニ同^ジト」と注する。

11 皎皎 はつきりとしている様、明白な様。

爲誰多 どちらが多いとみなされるか。久保天随・大野実之助ともに「為」を「タメニ」と訓じ、「誰がために多き」とするが、今は取らない。

【通 釈】

三青鳥にも比すべき使者は、西王母のごとき我が妻の元を去り、手紙を持って、我が旅先に立ち寄ってください。その手紙を見れば、我が断腸の思いは、あたかも琴の

弦が裁ち切れるがごとく切なく、この愁いは、如何ともし難い。

遙かに思い遣れば、おそらく妻は、美しい窓辺に寄り添い、細い手で雲和の琴を奏でていることであろう。

彼女の奏でる曲の中には、深い思いが籠められている。それは、青い松に女羅がまといつくように、私のことを慕っている、というもの。

水を山の井戸のなかに注げば、その湧き出でる泉の水と一体となつて、同じ波を立てる。そのように、君と私とは違つていても、いまや、一心同体。

秦の地にいる私の心と、楚に留まっている君の恨みと、どちらがその思いが多いか、その答えは明白だ。一心同体である我々にとって、同じであるに決まっている。

0 其二

- 1 青樓何所在
- 2 乃在碧雲中
- 3 寶鏡挂秋水
- 4 羅衣輕春風
- 5 新妝坐落日
- 6 悵望金屏空
- 7 念此送短書

其^{其二} 其二
 青樓^{せいろう} 何れの所^{ところ}にか在る
 乃^{すなは}ち在^あり 碧雲^{へいぐん}の中
 寶鏡^{ほうきやう} 秋水^{しゅうすい}を掛けるがごとく
 羅衣^{らいうい} 春風^{しゅんぷう}に輕し
 新妝^{しんさう} 落日^{らくじつ}に坐し
 悵望^{ちやうぼう}すれば 金屏^{きんぺい} 空し
 此^{こゝ}を念^{おも}つて 短書^{たんしょ}を送らんとす

8 願因雙飛鴻

願願はくは双飛鴻きゆうこうに因よらん

【校 語】

3 水 『王琦本』『宋本』『分類補注本』『李詩通』『全唐詩』

は「一作『月』」と注する。

5 妝 『宋本』は「粧」に作り、「分類補注本」は「粧」に作る。

6 金 『王琦本』『宋本』『分類補注本』『全唐詩』は「一

作『錦』」と注する。

7 念此 『王琦本』『宋本』『分類補注本』『全唐詩』は「一
作『剪綵』」と注する。

8 因 『王琦本』『宋本』は「一作『同』」と注する。

飛鴻 『咸淳本』はこの下に「一本『青樓何所在』作
一首」と注する。

【詩型・韻字】

五言古詩。中・風・空・鴻（東韻）

【語 釈】

0 其二 この詩は、虚構性のかかなり強い作品で、必ずし

も李白と妻との実体験に基づくものと考えerる必要は
ないであろう。設定としては、ある男が、高貴な女

性に求婚したいと願って、ラブレターを出そうとし
ている情景を描いている。

1 青樓 「青樓」には、基本的に①高貴な女性の棲む楼

閣（青漆の彩画が施されているのでこう言う）、②
妓楼、の二つの意味があるが、ここでは①がふさわ
しい。この冒頭の二句は、明らかに、魏の曹植「美

女篇」の「借問ス女ハ安クニ居ルト、乃チ在リ城ノ南端ニ。
青樓臨ニ大路ニ、高門結フ重關ヲ。」を意識している。

安旗主編『李白全集編年注釈』は「許氏ハ爲リ相
門ノ女、故ニ云フ。」と注する。

2 碧雲 青空の中にある雲。

3 挂秋水 ここでは、壁に掛かっている鏡を秋の澄んだ

水に喩えている。

4 羅衣 うすぎぬの衣。

5 新妝 化粧したばかりの状態を言う。

6 金屏 金のように美しい屏風（ついたて）。

空 人気ない。

7 短書 短い手紙。『六臣注文選』卷三一の江淹「雜体
詩三十首、李都尉陵」に「袖中ニ有リ短書、願ハクハ
寄セン雙飛燕ニ」とあり、李周翰の注に「短書ハ謂フ

小書ヲ也」とある。李白のこの詩の末尾二句は、こ

の江淹の詩を踏まえるが、「燕」ではなく「鴻」（大

雁)としてゐるのは、韻字の關係もあるが、中国古典詩の伝統として、「雁」「鴻」が手紙を運ぶ鳥として知られていたためである。「短書」とは縁語的な繋がりを持つことになる。

【通 釈】

青楼はいずこにあるかと言えば、それは、高く聳えて青空の雲の中。

室内には、澄んだ秋の水のような宝鏡が掛かり、その人のうすぎぬの衣は、軽く春風に舞い上がる。

彼女は、化粧をし直したばかり、夕日の中に座って、哀しげに人影のない金のついたてを眺めていることであろう。

そう思えばこそ、短い手紙でも贈って差し上げたくなく。願わくば、翼を並べて飛ぶ二羽の大雁に託して。

0 其三

- 1 本作 一行書
- 2 殷勤道相憶
- 3 一行復一行
- 4 滿紙情何極
- 5 瑤臺有黃鶴

其の三
 本と一行の書を作り
 殷勤 相憶ふを道ふ
 一行 復た一行
 紙に滿つるも 情何ぞ極まらん
 瑤台 黄鶴有り

- 6 爲報青樓人
- 7 朱顏凋落盡
- 8 白髮一何新
- 9 自知未應還

為に青樓の人に報せよ
 朱顏 凋落し尽し
 白髮 一に何ぞ新たなる
 自ら知る 未だ心に還るべからざる

- 10 離居經三春

離居 三春を経たり

- 11 桃李今若爲

桃李 今若爲

- 12 當窗發光彩

窓に當って 光彩を發せん

- 13 莫使香風飄

香風をして 飄らしむ莫れ

- 14 留與紅芳待

紅芳を留与して待て

【校 語】

- 0 其三 「咸淳本」は第四首目に配する。

- 2 殷勤 「咸淳本」は「慇懃」に作る。

- 道 「咸淳本」は「坐」に作り、「一作「道」と注する。

- 憶 「宋本」は「憶」に作る。

- 9 未應還 「咸淳本」は「一作「未因老」と注する。

- 還 「王琦本」「宋本」は「一作「老」と注する。

- 10 居 「王琦本」「宋本」「分類補注本」「全唐詩」は「一

- 作「君」と注する。

- 12 窗 「宋本」は「牕」に、「分類補注本」は「牕」に、

- 「李詩通」は「窓」に作る。

14 與 「李詩通」は「取」に作る。「王琦本」「宋本」は「一作『取』」と注する。

【詩型・韻字】

五言古詩。憶・極（職韻）人・新・春（真韻）彩・待（賄韻）

【語 釈】

0 其三 長らく旅に出ている男が、家で待つ妻に寄せるという設定。「其二」同様、相手の女性は「青楼」に棲む。

1 本 ここでは「最初は…（のつもりだった）」の意。

一行書 一行ほどの短い手紙。南朝・梁の何遜の「從主移西州寓直齋内、霖雨不晴、懷郡中遊聚」に「欲ス寄セント一行ノ書ヲ、何ゾ解ケン三秋ノ意」とある。

2 殷勤 「慇懃」に同じ。ねんごろに。

5 瑤台 月中にあるという玉をちりばめた台。仙人・仙女が棲む。「楚辭」「離騷」にも見える。李白の「清平調詞、其一」にも「若シ非ヌンバ群玉山頭ニ見ルニ、なまがみ向ニカツテ瑤臺月下ニ逢ハン」とある。

黄鶴 黄色い鶴。仙人の乗りものという。手紙を運ぶ使者としての用法では、梁の江淹の「去故郷賦」に

「願ハクハ使^三メシテ黄鶴ヲシテ^ラ分報^セニ佳人^ニ」（「黄鶴」と「黄鶴」はしばしば混用されるので、ここでは同一のものと考えてよい。王琦は「黄鶴」として引用している）とある。

6 爲 我がために。

10 離居 離れて棲む（人）。「楚辭」「九歌」「大司命」に

「將^三以^テ遺^ニラント兮離居^ニ」とある。

三春 三年。但し、大野実之助は春三カ月と解釈している。安旗主編「李白全集編年注釈」は「白自^二開元十八年春^一赴^二長安^一、至^二ルモ二十年春^一猶^ニ在^二洛陽^一、故^ニ云^二三春^一」と注する。

11 若爲 「如何」に同じ。

13 香風飄 「香風」は花の香を含んだ風。「飄」はそれが吹き飛んでしまうこと。つまり、風が花の香を運び去ってしまうということで、女性の色香（若さ）が失われることを暗示する。

14 留與 留め置く。「与」は動詞の後ろに置かれる助字。特に意味はない。「其四」に見える「聞与」の「与」と同じ用法。

紅芳 赤い花。ここでは、妻の若き美貌をも暗示している。梁の江淹の「銅爵妓」に「瑤色^一行^二應^レ罷^ム、紅芳^一幾^レ爲^レレ^二樂^一シミヲ」とある。

【通 釈】

はじめは一行ほどの短い手紙で、ねんごろに君を思っていることを、したためようと思っていた。

ところが、一行、また一行と増えていき、紙いっぱいになっても、情は尽きない。

瑤台に棲むという黄鶴よ、我がために、青楼に暮らすあの人に伝えてくれ。

私の血色の良かった顔色もやつれ果て、白髪が新たに驚くほど増えてきた。

私は、自分が当分帰れないことを知っている。家を離れて、すでに三年。

我が家の桃李は、今、どうなっていることやら。窓の側で、輝くほどの美しさを発していることであろう。

春風に、その香りを吹き飛ばされないように。香り豊かな紅の花を留め置いたまま、私の帰りを待っていてほしい。

0 其四

其の四

- 1 玉筋落春鏡
- 2 坐愁湖陽水
- 3 聞與陰麗華
- 4 風烟接鄰里

玉筋ぎよくちゆう 春鏡しゆんきやうに落ち
 坐はなはだ愁うれふ 湖陽こやうの水みづ
 聞かんとす 陰麗華いんれいけわ
 風烟かうえん 鄰里りんりに接すと

- 5 青春已復過
- 6 白日忽相催
- 7 但恐荷花晚
- 8 令人意已摧
- 9 相思不惜夢
- 10 日夜向陽臺

青春せいしゆん 已すでに復またた過すぐ
 白日はくじつ 忽たちまち相あひう催ながす
 但ただ恐おそる 荷花かかの晩あるを
 人ひとをして 意い已すでに摧くだけしむ
 相思さうし 夢ゆめを惜おしまず
 日夜にちや 陽臺やうだいに向むかはん

【校 語】

0 其四 「咸淳本」では第五首目に配する。

1 春 「王琦本」「宋本」は「一作「清」と注する。

3 聞 「王琦本」「宋本」は「一作「且」と注する。

陰 「李詩通」は「陰」に作る。

4 烟 「李詩通」は「煙」に作る。

7 荷 「王琦本」「宋本」「全唐詩」は「一作「飛」と注する。

【詩型・韻字】

五言古詩。水・里（紙韻）催・摧・臺（灰韻）

【語 釈】

0 其四 この詩は、李白が女性になり代わって歌う。安旗主編「李白全集編年注釈」も、「此ノ詩自ラ

代ハリテ内ニ贈ル。」と評する。久保天随・大野実之助ともに男性の一人称で翻訳しているが、「玉筋」荷花」をはじめとして、女性の一人称と考える方が適切と思われる「詩語」が頻出する。

1 玉筋 すなわち、玉のように美しい箸。二筋になって流れる女性の涙を喩える。「白孔六帖」卷六四「哭」の「玉筋」の条に「甄后面白ク、涙雙垂シテ如シ玉筋ノ。」とあり、また、梁の劉孝威「独不見」に「誰カ憐ム雙玉筋ノ、流レテ面ニ復タ流レ襟ニ」とある。

春鏡 見慣れない表現。春の水のように澄んだ鏡という意か。ここでの「鏡」は、おそらく下句の「湖陽水」の水面を喩える。李白は、川や湖の水面を鏡に喩えるのを好んだ詩人である。

2 坐愁 深く愁える。「坐」は、日本の伝統的な訓では「ソゾロニ」と読み、「なんとはなしに」といった意味で翻訳することが多いが、ここでは「深く」「こと」に「はなはだ」といった意味（程度が甚だしいこと）に取りたい。張相『詩詞曲語辭匯釈』は「坐」の一義として「甚辞。猶深也、殊也。」と解釈している。古楽府「古西門行」に「何ソ能ク坐愁フルコト怖鬱タル」とある。

湖陽水 『王琦本』は「湖陽縣、本ト漢ノ舊縣、唐時

隸ス唐州淮安郡ニ。」と注する。現在の河南省唐河県西南の湖陽鎮。その付近を流れる川としては比水、醴水がある。なお、次句にある陰麗華ゆかりの新野は湖陽の西北約三十キロにある。

3 與 動詞の後ろに添える助字。「其三」の「語釈」を参照。

陰麗華 新野（現在の河南省新野県）出身の女性。後漢の光武帝の皇后。光武帝が新野を訪れたとき、その美しさを耳にし喜び、後、歎じて「妻を娶るならば、陰麗華のような女性が良い。」と語り、果たして、しばらくして彼女を納れ、皇后とした。『後漢書』卷十「皇后紀上・光烈陰皇后紀」に「光烈陰皇后諱ハ麗華、南陽新野ノ人。初メ、光武適キ新野ニ、聞キ后ノ美ナルヲ、心ニ悦レ之ヲ。後至リ長安ニ、見ニ執金吾ノ車騎ノ甚ダ盛ニナルヲ、因ツテ歎ジテ曰ク、「仕宦スレバ、當ニ作ル執金吾ト、娶レバ妻ヲ、當ニ得ニ陰麗華ヲ。」更始元年六月、遂ニ納ル后ヲ於宛當成里ニ。時ニ年十九。」とある。

4 風烟接鄰里 新野と湖陽とは、同じ風が吹き、同じ雲が連なっていると言えるほど近くにある、隣り合わせのまちであるということ。『王琦本』は「自リ新野ニ至ル湖陽ニ、道里遠近不レ及ニ百里ニ、所謂風

烟接ニル鄰里ニ」と注する。

5青春 ここでは、季節としての春と人生における青春とを重ねている。

6白日 太陽の意であるが、日月の推移も暗示している。

7荷花晚 ハスの花が衰えていく。同時に、人の老いも暗示する。

10陽臺 いわゆる「巫山雲雨」の故事を踏まえる。戦国

時代、楚の宋玉の「高唐賦」（『文選』卷一九）の序に「昔者襄王與宋玉遊於雲夢之臺、望高唐之觀。其上獨有雲氣。…王問於玉曰「此レ何ノ氣也ト。」玉答ヘテ曰ク『所謂朝雲ナル者也。』王曰ク『何ヲカ謂フト朝雲ト。』玉曰ク『昔者先王嘗テ遊ビ高唐ニ、怠リテ而晝寝ス。夢ニ見ル一婦人ヲ。曰ク「妾ハ巫山之女也。爲ニ高唐之客。聞ク君ガ遊ブラ高唐ニ、願ハクハ薦メント 枕席ヲ。」王因ツテ幸レ之ヲ。去ルニ而辭シテ曰ク「妾ハ在リ巫山之陽、高丘之岨ニ。旦ニ爲リ朝雲ト、暮ニ爲リ行雨ト、朝朝暮暮、陽臺之下。」旦朝ニ視レバ之ヲ、如シ言ノ。故ニ爲ニ立レテ廟ヲ、號シテ曰フ朝雲ト。」とある。つまり「陽台」とは、生き別れとなつた楚王と巫山の神女とが、唯一出会える場所ということになる。

【通 釈】

玉の箸のような二筋の涙が、春の鏡に流れ落ちる。それは、湖陽の水。私の心は深く愁える。

聞けば、「妻を娶らば陰麗華」と讀えられた陰皇后ゆかりの新野は、ここ湖陽とは、風や雲を共にする、隣県どうし。

春の季節はすでに終わり、日月は急かされるように、またたく間に過ぎ去っていく。

ただ恐ろしいのは、蓮の花が衰えてゆくこと。人の心を滅入らせてしまう。

あなたを思えばこそ、夢見ることを惜しみはしない。せめて夢の中で、楚王と巫山の女神のごとく、日夜、陽台のもとでお会いしたいものです。

0 其五

- 1 遠憶巫山陽
- 2 花明淥江暖
- 3 躊躇未得往
- 4 淚向南雲滿
- 5 春風復無情
- 6 吹我夢魂斷
- 7 不見眼中人

其の五

遠く憶ふ 巫山の陽
花明らかに 淥江暖かなり
躊躇して 未だ往くを得ず
涙は南雲に向かつて満つ
春風 復た情無く
我が夢魂を吹きて断つ
眼中の人を見ず

8 天長音信短 てんなが 天長くして おんしんみぢか 音信短し

【校 語】

0 其五 「咸淳本」では第三首目に配する。

2 暖 「分類補注本」「李詩通」は「煖」に作る。

3 躡 「分類補注本」は「踳」に作る。

躡 「分類補注本」は「踳」に作る。

【詩型・韻字】

五言古詩。暖・滿・斷・短（旱韻）

【語 釈】

0 其五 この詩は卷五所収「大堤曲」と酷似する。第一句から第三句までが全く異なり、第六句「斷」が「散」に、第八句「短」が「斷」になっているほかは、みな同じである。おそらくいづれかが初校で、今一つがその改訂版なのであろう。「王琦本」は「此ノ詩與ニ樂府ノ「大堤曲」一相同ジ、唯タ首ノ三句異ナル耳。編者重ネテ入ル。」と注する。内容的には、男の一人称で語られていると考えてよいであらう。

1 巫山陽 「巫山雲雨」の故事を踏まえる。「其四」の語釈を参照。「陽」は南。女の居場所を言う。

2 淥江 緑色で清らかに澄んだ長江。

4 南雲 妻の居るところを言う。「雲」と言うのは、「巫山雲雨」を意識するためであらう。また、妻の居所

が雲に隠されて見えないということも暗示する。陸

機の「思親賦」に「指シ南雲ヲ以テ寄レ欽ニ、望ミテ

歸風ヲ而效レ誠ヲ」とあり、また南朝・陳の江総の「於

長安歸還揚州九月九日行薇山亭賦韻」に「心ハ

逐ツテ南雲ヲ逝キ、形ハ随ツテ北鴈ニ來ル」とある。

6 夢魂 夢の中にある魂。ここもやはり「巫山雲雨」の、

夢の中の楚王と巫山の女神との出会いを意識す

る。

7 眼中人 常に自分の意中にある、親しい人。「六臣注

文選」卷二五所収の西晋・陸雲の「答張士然」に「髻

髻タリ 眼中ノ人」とあり、注に「濟曰ク、：眼中ノ

人トハ 謂フ親識ヲ也。」とある。

【通 釈】

はるか思い出すのは、君の居る巫山の南。（今や春となり）花は明るく、澄んだ川はさぞ暖かなことであらう。ぐずぐずして今だに行くことができない。そのくせ、君の居る南の雲の方を見ては涙が満ち溢れる。春の風は心なく、私をすぐに目覚めさせて、夢魂を吹

きちぎってしまふ。

意中の人に会うことはできない。空は果てしなく続き、君は遠くにいる。それなのに、音信は何と短いことか。

0 其六

其の六

- 1 陽臺隔楚水 陽臺 楚水を隔て
- 2 春草生黄河 春草 黄河に生ず
- 3 相思無日夜 相思 日夜と無く
- 4 浩蕩若流波 浩蕩として流波の若し
- 5 流波向海去 流波 海に向つて去り
- 6 欲見終無因 見んと欲するも終に因無し
- 7 遙將一點淚 遙かに一点の涙を將つて
- 8 遠寄如花人 遠く寄せん 花の如き人

【校 語】

2 黄河 『王琦本』『宋本』『分類補注本』『全唐詩』はこの句の下に「一作『陰雲隔楚水、轉蓬落渭河』」と注する。

4 流 『咸淳本』は「一作『深』」と注する。

5 流 『咸淳本』は「一作『深』」と注する。

6 無因 『王琦本』『宋本』『分類補注本』『全唐詩』はこの句の下に「一作『定繞珠江濱』」と注する。但し『繞

を『分類補注本』は「饒」に、『全唐詩』は「遶」に作る。

7 將 『咸淳本』は「一作『持』」と注する。

【詩型・韻字】

五言古詩。河・波（歌韻）因・人（真韻）

【語 釈】

0 其六 この詩も、男の一人称で歌われている。

1 陽臺 ここも「巫山雲雨」の故事が踏まえられている。詳細は「其四」の語釈を参照。

楚水 長江のこと。特に楚の地方（湖北・湖南一帯）を流れるそれを言う。妻の居る場所。

2 黄河 男の住む地区を指す。女の居所のある南方の「楚水」と対比させる。

4 浩蕩 果てしなく流れる様。

5 流波 前の句の末尾の二字を、次の句の冒頭で繰り返している。いわゆる「蟬聯体」と呼ばれる技法。歌謡的な雰囲気を作り出す。

6 無因 すがない。

7 將 「以」に同じ。

一点 一粒。

8 如花人 愛する女性を指す。

【通 釈】

君の住む陽台のあたりは、楚を流れる長江によって隔てられている。一方、私のいる北方の黄河のあたりは、ようやく春草が生え始めたばかり。

日夜となく君を思う。あたかも果てしなく流れる川波のように。

流れる川波は海に向かって去って行き、二度と見ようも、すべはない。

はるかに、一粒の涙を、花のごとく美しい君に送り届けたい。

0 其七

- 1 妾在春陵東
- 2 君居漢江島
- 3 百里望花光
- 4 往來成白道
- 5 一爲雲雨別
- 6 此地生秋草
- 7 秋草秋蛾飛
- 8 相思愁落暉

其の七

妾は春陵の東に在り
君は漢江の島に居る
百里、花光を望み
往來、白道を成す
一たび雲雨の別れを為し
此地、秋草を生ず
秋草、秋蛾飛び
相思ひて、落暉に愁ふ

- 9 何由一相見
- 10 滅燭解羅衣

何に由りてか一たび相見
燭を滅して羅衣を解かん

【校 語】

1 妾 『王琦本』は「一作『昔』」と注する。『宋本』は「昔」に作り、「一作『妾』」と注する。

春 『宋本』『分類補注本』は「春」に作る。下句の「漢江」との対の関係で、ここでは地名が置かれるのが自然であるが、「春陵」という地名は一般に見られない。従って「春陵」がよいであろう。

4 白道 『王琦本』はこの句の下に「一作『日日采靡蕪、上山成白道』。又『百里』、蕭本作『一日』」と注する。

『宋本』『分類補注本』『全唐詩』は「一作『日日采靡蕪、上山成白道』」と注する。但し『分類補注本』は「採」を「采」に作り、「靡蕪」を「靡無」に作る。また『全唐詩』は「採」を「采」に作る。『李詩通』はこの二句を「日日采靡蕪、上山成白道」に作っている。

8 暉 『宋本』『咸淳本』は「輝」に作る。

9 由 『李詩通』は「時」に作る。

10 羅衣 『王琦本』はこの句の下に「末二句「一作『昔時携手去、今時流淚歸。遙知不得意、玉筯點羅衣』」

四句」と注する。「宋本」はこの句の下に「一本『輝』下添『昔時携手去、今時流淚歸。遙知不得意、玉筋點羅衣』」と注する。「李詩通」「全唐詩」は、この句の下に「一本無此二句、『落暉』下有『昔時携手去、今日流淚歸。遙知不得意、玉筋點羅衣』四句」と注する。

【詩型・韻字】

五言古詩。鳥・道・草（皓韻）飛・暉・衣（微韻）

【語 釈】

0 其七 この詩は、女性から男に寄せるという設定になつてゐる。安旗主編『李白全集編年注釈』も「此詩モ亦タ自ラ代リテ内ニ贈ル。」と注する。

1 妾 女性の一人称。

春陵 『通典』卷一七七「隨州・棗陽（そうよう）」の条に「漢、春陵、故城、ハ在二今ノ縣ノ東二。」とある。今の湖北省棗陽県。李白と妻・許氏の居所のあつた安陸は、その東南約一五〇キロに位置し、また「其四」に見える湖陽は、北約三〇キロに位置する。

2 漢江 湖北省を東南に流れ、武漢において長江に合流する大河。

3 花光 花の輝き。陳後主の「梅花落二首、其一」に「映シテ日ニ花光動キ、迎レヘテ風ヲ香氣來タル」とある。ここでは春の光景を言うか。

4 白道 『王琦本』「洗脚亭」の注に「白道ハ、大路也。人ノ行跡多ケレバ、草不レ能ハ生メル、遙カニ望メバ、白色ナリ。故ニ曰フ白道ト。唐詩多ク用レフ之ヲ。鄭谷ノ白道曉霜ニ迷フ、韋莊ノ『白道向レカッテ村ニ斜ナリ』、是也。」とある。

5 雲雨 「巫山雲雨」の故事を踏まえる（「其四」の注を参照）。

7 秋草 前の句の句末の二字を繰り返し用いる。いわゆる「蟬聯体」の技法。

秋蛾 秋の蛾。梁の江淹の「扇上綵畫賦」に「促織兮始メテ鳴キ、秋蛾兮初メテ飛フ」とあり、また、梁の吳均の「與柳惲相贈答詩六首、其五」に「寒蟲隱レテ壁ニ思ヒ、秋蛾繞レツテ燭ヲ飛ブ」とある。秋の寂しげな情景を描くときに用いる。

8 落暉 夕日を言う。老いへの恐れを暗示している。

10 解羅衣 うすぎぬの衣の帯を解く。「子夜四時歌七十五首」（『樂府詩集』卷四四「清商曲辭一」）中の「秋歌十八首」第四首目に「開レケバ窗ヲ秋月ノ光、滅シテ燭ヲ解ク羅裳一」とある。

【通 釈】

私は春陵の東に居て、あなたは漢江の島にいらっしやる。

春のある日、家の外を眺めてみると、輝くばかりの花々が満ち溢れ、前の大通りは人の往来で路面も白くなっていた。

ひとたびあなたと雲雨の別れをしてからは、この地も秋の草が生い茂るようになってしまった。

秋の草には秋の蛾が飛び交い、私はあなたを思って、暮れ行く日の光を愁えている。

どうすれば、あなたと再び出会って、ともしびを消し、うすぎぬの衣の帯を解くことができるのだろうか。

0 其八

1 憶昨東園桃李紅碧枝

其の八 憶ふ 昨 東園の桃李 紅碧の枝

2 與君此時初別離

君と此の時初めて別離す

3 金瓶落井無消息

金瓶 井に落ちて消息無く 人をして行きて嘆じ復た坐して思

4 令人行嘆復坐思

坐して思ひ行きて歎じ楚越を成す

5 坐思行歎成楚越

春風玉顔畏銷歇

7 碧窗粉粉下落花

碧窓 粉粉として 落花を下し

8 青樓寂寂空明月

青樓 寂寂として 明月空し

9 兩不見

兩つながら見ず

10 但相思

但だ相思ふ

11 空留錦字表心素

空しく錦字を留めて心素を表す

12 至今緘愁不忍窺

今に至るも愁を緘して窺ふに忍びず

【校 語】

1 紅 『咸淳本』は「花」に作り、「一作『紅』」と注する。

4 嘆 『宋本』『分類補注本』『咸淳本』『李詩通』『全唐詩』は「歎」に作る。

5 坐思 『咸淳本』は「一本無下『坐思』二字」と注する。

6 銷歇 『咸淳本』はこの句の下に「一本云、『楚越春風畏銷歇』」と注する。

7 窗 『宋本』は「牕」に作り、『分類補注本』『李詩通』は「牕」に作る。

11 空留 『咸淳本』は「一本無此二字」と注する。

表 『分類補注本』は「素」に作る。

【詩型・韻字】

長短句（雜言）古詩。枝・離・思（支韻）越・歇・月

(月韻)思・窺(支韻)

【語 釈】

0 其八 この詩も女性の一人称で、女性が男に寄せるといふ設定になっている。安旗主編『李白全集編年注釈』は「此ノ詩モ亦タ自ラ代レハリテ内ニ贈ル。首ノ二句ハ謂フ初メテ入ル長安ニ之行ヲ。」と注する。

1 東園桃李 三国魏の阮籍「詠懷詩、其三」(『文選』卷二三)に「嘉樹下成ス蹊ヲ、東園桃ト與レ李」とある。紅碧 花の赤と葉の緑を言う。

3 金瓶落井無消息 「金瓶」は金のつるべ。楽府の「淮南王篇」(『樂府詩集』卷五四「舞曲歌辞三」)に「後園鑿レテ井ヲ銀ニテ作レリ牀ヲ、金瓶素綆汲ム寒漿ヲ」とある。「金瓶落井」とは、つるべを(深い)井戸に落とすと、果てしなく落ちて行くということから、一度去ってしまったと行方が知れなくなるという喩え。齊の釈宝月「估客樂二曲、其二」に「有レバ信數^{しほ}レ書ヲ、無レバ信心ニ相憶フ。莫レ作ス瓶^{びん}落^おトス井ニ、一タビ去レバ無シ消息。」とある。なお、大野実之助『李太白詩歌全解』は、つるべが落ちた後はなんの音もしなくなるように、相手からは何の音沙汰もなくなった、という方向で解釈している。

4 行嘆復坐思 南朝・宋の鮑照「擬行路難、其四」に「人生亦タ有レ命、安クシソ能ク行^{キテ}歎^シ復タ坐^{シテ}愁^{ヘン}」とある。

5 坐思行歎 前の句の語を繰り返す。いわゆる「蟬聯体」の技法。

成楚越 「楚」は湖南・湖北一带、「越」は浙江省一带。「成楚越」とは、男女二人がお互いに遠く離れていることの喩え。必ずしも、実際の両者の位置関係を言っているわけではないであろう。

6 銷歇 消え失われること。ここでは美貌が衰えることを言う。南朝・宋の鮑照「行樂至城東橋」(『文選』卷二二)に「容華坐^{はな}タ消歇^シ、端^{まさ}ニ爲^レ誰ガ苦辛^ス」とある。

7 碧窗 碧紗を掛けた窓。女性の部屋を暗示する。

8 青樓 「其二」の注を参照。女性の住む建物を言う。

11 空留錦字表心素 北朝・前秦時代の竇滔の妻・蘇惠(字は若蘭、武功の人)が、秦州刺史の任のため遠く離れて住む夫に、五彩の錦を織り、回文旋回詩(八百余字から成り、縦横、逆から読んでも文意が通じるという詩)を作つて贈つたという故事を踏まえる『晋書』卷九六「列女伝」の「竇妻蘇氏」、『文苑英華』卷八三四所収の則天武后「蘇氏織錦回文記」

等を参照)。「素」は心が純粹であるという意であると同時に、手紙の縁語としての白絹の意も暗示している。

12 緘愁 「緘」は本来、手紙を入れる箱を封じる紐のこと。

ここでは愁いを籠めた手紙に封をすることを言う。

陳の江総「七夕」に「横波翻ツテ 瀉レ涙ヲ、束素
反ツテ 緘ス愁ヲ」とある。

【通 釈】

懷えば以前、東園の、赤き花・緑の葉をつけていた桃李の枝の下、あなたとこの時はじめてお別れした。金のつるべが井戸に落ちれば、もはやその行方はわからない。あなたもそれと同じ。私は歩いては嘆き、座しては思っている。

座しては嘆き、歩いては思い、いつの間にか、二人の距離は楚と越ほどにも離れてしまう。恐ろしいのは、春風が私の美しい顔を消し去ってしまうこと。

緑紗のかかった窓には、粉々として花が散り、青い楼閣には、寂々として空しく明月が昇っている。

二人は会えない、ただ慕い続けるだけ。

空しく錦の字をしたためて、一途な心を述べてみたい。愁いを籠めて封をしたけれど、もう、どうしても見直す

気にはなれない(なぜなら封じ籠めた愁いがまた溢れ出てきそうだから)。

0 其九

1 長短春草緑

2 縁階如有情

3 卷施心獨苦

4 抽却死還生

5 覩物知妾意

6 希君種後庭

7 閑時當採掇

8 念此莫相輕

其の九

長短 春草緑に

階に縁り 情有るが如し

卷施 心独り苦しみ

抽却 死も死して還た生く

物を見て妾が意を知れ

希はくは君 後庭に種えん

閑時 当に採掇すべし

此を念ひて相軽んずる莫れ

【校 語】

2 階 「王琦本」は「繆本作「門」と注する。「宋本」

は「門」に作る。

3 施 「分類補注本」「全唐詩」「唐宋詩醇」は「施」に

作る。

4 却 「全唐詩」「唐宋詩醇」は「卻」に作る。

7 採 「李詩通」は「采」に作る。

8 閑 「全唐詩」は「圓」に作る。

【詩型・韻字】

五言古詩。情・生（庚韻）庭（青韻）輕（庚韻）（おそらく庚韻・青韻を通韻としている）

【語 釈】

0其九 この作品も女性の一人称で語られている。安旗

主編『李白全集編年注釈』も「此ノ詩モ亦タ自ら代ハリテ内ニ贈ル」と注する。

8卷施心獨苦 「卷施」は「卷施」とも書く。植物の一

種で、別名「宿莽」という。『芸文類聚』卷八一「葉香草部上」の「卷施」の条に「爾雅」ニ曰ク「卷施草、拔レクモ心ヲ不レ死セ。」宿莽草也。『離騷』ニ曰ク「多ク

（楚辞）では「夕」に作る）攬^と華州之宿莽^ヲ。』『南越志』ニ曰ク「寧郷縣ノ草多シ卷施。拔レクモ心ヲ不レ死セ。江淮ノ間謂フ之ヲ宿莽ト。」とあり、『楚辞』「離騷」

の王逸注に「草冬ニ生ジ不レ死セ者、楚人名ソクテ曰ク宿莽ト。」とある。つまり、草の芯の部分抜き取つても死なないという、生命力の強い植物。ここでは、

女性の愛情・貞操の堅さを暗示している（郁賢皓『李白詩選』の説）。また、「苦」とは、「心苦しい」という意と、「にがい」という意を掛けた表現と考えられるが、この草がにがいものであるか否かについ

ては未詳。

4 抽却 抜き取る。

5 覩物 「覩」は覩る。「物」は「卷施」を指す。

6 後庭 裏庭。

7 採掇 摘み取る。

【通 釈】

（あなたがいなくなつてから）長短さまざまの春草は緑に色づき、きざはしに沿つて、あたかも情けがあるかのように生えている。

中でも卷施草は、独り苦しそう。芯を引き抜いてみると、枯れてはまた生き返る。

この、いじましい草を見て、私の心も察して欲しい。どうか、裏庭にでも植えてくださいますように。

そして、閑な時にでも摘み取つてみて下されば、その耐え忍ぶ強さがおわかりになるはず。この草も私と同様、おろそかになさらないでおいってください。

0 其十

1 魯縞如玉霜

2 筆題月支書

3 寄書白鸚鵡

其の十
魯縞は玉霜の如し
筆題す 月支の書
書を寄す 白鸚鵡

- 4 西海慰離居 西海せいかい 離居りきよを慰なぐさめん
 5 行數雖不多 行數ぎょうすう 多おほからずと雖いへども
 6 字字有委曲 字字じじ 委曲ゐま有り
 7 天末如見之 天末てんまつ 如ごとし之これを見みば
 8 開絨淚相續 絨かぬを開ひいて淚なみだ相あひ続つかん
 9 淚盡恨轉深 淚なみだ盡たつて恨うらみ転うた深ふかく
 10 千里同此心 千里せんり 此この心こころと同じからん
 11 相思千萬里 相思あひまふこと 千せん万ばん里
 12 一書直千金 一書いっしょ 直あたり 千せん金きん

【校 語】

2 筆「王琦本」「宋本」「全唐詩」は「一作「剪」と注する。

支「王琦本」は「蕭本作「氏」と注する。「分類補注本」「李詩通」「全唐詩」「唐宋詩醇」は「氏」に作る。

4 慰「王琦本」は「繆本作「畏」と注する。「宋本」は「畏」に作る。

10 同此心「宋本」「李詩通」は「若在眼」に作り、さらにこの句の後に「萬里若在心」の句がある。「李詩通」は、この「若在心」の句の下に、「今本作「淚盡恨轉深、千里同此心」と注する。

此心「王琦本」はこの句の下に「繆本作「千里若在眼、萬里若在心」と注する。「全唐詩」も「一作「千里若在眼、萬里若在心」と注する。

12 直「全唐詩」は「直」に作る。

【詩型・韻字】

五言古詩。書・居（魚韻）曲・續（沃韻）深・心・金（侵韻）

【語 釈】

0 其十 この詩は、妻が遠く旅先にある夫に寄せるという設定。安旗主編『李白全集編年注釈』は「此ノ詩當ニ作ル魯地ニ。」と注する。

1 魯縞 魯地方（現在の山東省）に産する白い絹。「王琦本」は「顔師古「漢書註」、縞ハ、縉之精白ナル者。魯縞ハ、魯地ノ所レ作ル之縉。」と注する。李白の「送魯郡劉長史遷弘農長史」にも「魯縞如シ白烟」とある。古くから、純白で軽やかな肌触りの絹（素）として知られていた。

2 月支「月氏」とも書く（「史記」「漢書」）。音は同じ。唐の張守節「史記正義」卷一三三「大宛列伝」の「月氏」の注に「氏」音ハ、「支」。涼・肅・瓜・沙等ハ、

本_ト月氏國之地。「漢書」ニ云フ「本_ト居_ル敦煌・祁連_ノ間_ニ是也。」とある。ここでは、もと月氏國のあった、いわゆる河西回廊_ニ帯を言う。

3 白鸚鵡

『王琦本』はこの句について「用_{ヒテ}白鸚鵡_ヲ寄_ス書_ヲ、事_奇ナレドモ而未_レタ詳_ラカニセ所_ヲ本_ツク」と

注する。おそらく鸚鵡が人の言葉を話せるといふことから、手紙を運ぶ使者としての着想を得たのである。『初学記』卷三〇「鸚鵡」の条所引の『南方異物志』によれば「鸚鵡_ニ有_リ三種_一。青_キハ、大ナルコト如_シ烏_白ノ（くろもせず）。一種_ハ白、大ナルコト如_シ鴟_鴞ノ（ふくろう）。一種_ハ五色、大_ナリ於_青者_{ヨリ}。交州・巴南盡_ク有_リ之。」という。

また、南宋の范成大「桂海虞衡志」卷六「志禽」に「鸚鵡多_シ於_金沙_江邊_ニ、五色俱備_ス。亦_タ有_リ白鸚鵡_一。」とある。李白は白色を好んだ詩人であるので「白鸚鵡」を登場させたのも、不思議ではない。

4 西海 西の果ての海。「東海」と対を成す。あるいは、「海」は砂漠を指すこともあるので、西域の砂漠地帯を言うか。また、漢代にあった西海城（現青海省）を指している可能性もある。

7 天末 天の果て。南朝・宋の謝莊「月賦」（『文選』卷一三）に「氣霽_ハ地_表ニ、雲斂_{マル}天_末ニ。」とある。

8 緘 手紙（あるいは手紙を入れる箱）を綴じる紐。「其八」の注を参照。
12 直「値」に同じ。

【通 釈】

玉霜のごときこの魯のしろぎぬに、月氏の地への手紙をしたためている。

この手紙を白い鸚鵡に託して、西の海に離れて住む夫を慰めたい。

行数は決して多くない。しかし、一字一字には、委曲を尽くしたつもり。

天の果て、もしあなたがこの手紙を見たならば、封を開いたまま、涙がとめどなく流れることだろう。

その涙が枯れはてても、無念の気持ちは、一層強まるはず。千里の彼方に離れていても、二人の心はいつも同じなのだから。

千万里も離れて、お互いに思い合っている。だからこそ、一通の手紙も、千金に値する。

0 其十一

1 美人在時花滿堂
美人去後餘空牀
美人去後餘空牀
美人去後餘空牀

其の十一

美人在りし時
美人去つて後
花堂に満ち
空牀を余す

3 牀中繡被卷不寢

4 至今三載聞餘香

5 香亦竟不滅

6 人亦竟不來

7 相思黃葉落

8 白露濕青苔

牀中の繡被は巻いて寝ねず
今に至って三載余香を聞く

香も亦た竟に滅せず

人も亦た竟に來たらず

相思へば黄葉落ち

白露 青苔を濕す

【校語】

0 其十一 『王琦本』はこの下に「此首一作『贈遠』」と

注する。『宋本』もこの詩の末尾に同様の注を付す。

『李詩通』はこの詩を「長相思三首」の第三首目に

収録し、詩の末尾に「此首一作『寄遠』」と注する。

また『全唐詩』『唐宋詩醇』は「長相思」の第二首

目に収録し、『全唐詩』は末尾に「此篇一作『寄遠』

」と注する。唐・韋莊編『又玄集』巻上は、この詩を

「長相思」として収めている。

2 餘 『全唐詩』は「空」に作り、「一作『花』」と注する。

餘空 『又玄集』は「空餘」に作る。『全唐詩』は「空

餘」に作り、「一作『餘空』」と注する。

3 牀 『又玄集』は「床」に作る。

卷不寢 『王琦本』『宋本』『分類補注本』『全唐詩』は

「一作『更不卷』」と注する。『李詩通』は「更不卷」

に作り、「一作『卷不寢』」と注する。『又玄集』は「竟

不掩」に作る。

4 聞餘 『王琦本』は「一作『猶聞』」と注する。

聞餘香 『宋本』『分類補注本』は「一作『猶聞香』」

と注する。『全唐詩』は「猶聞香」に作り、「一作『聞

餘香』」と注する。『又玄集』は「猶聞香」に作る。

7 落 『王琦本』『李詩通』『全唐詩』は「一作『盡』」と

注する。『宋本』は「盡」に作り、「一作『落』」と

注する。『咸淳本』は「盡」に作る。

8 濕 『王琦本』『宋本』は「一作『點』」と注する。『全

唐詩』は「點」に作り、「一作『溼』」と注する。『又

玄集』は「點」に作る。

【詩型・韻字】

長短句〔雜言〕古詩。堂・林・香（陽韻）來・苔（灰

韻）

【語 釈】

0 其十一 この詩は、つとに唐代から評判が高かったよ

うで、晩唐期の詞華集『又玄集』にも収録されている。なにより文字の異動の多さが、この詩の流布の

広さを物語っている。「美人」を男と取るか女と取るかによって、男の一人称、女の一人称いずれにも解釈できるが、やはり、素材の用い方から考えて、男の一人称として解釈するほうが自然であろう。久保天随・大野実之助ともに、男の立場から歌ったものとして解釈している。久保天随は、おそらく女性が死んでしまったのであろうと推測し、また大野実之助は、李白が高貴な女性のもとへ行つたところ、女性が不在であつたので、この詩を書いたのであると推理している。

1 堂 奥座敷。

2 牀 ベッド。寝台。

3 繡被 刺繡を施した掛け布団。

巻不寝 掛け布団を畳んだまま、眠らない。

4 間 香を嗅ぐ。

7 黄葉 秋に黄色に染まって落ちる葉。落葉は、盛唐以

前は「黄葉」とされることが多かったが、中唐以降、とりわけ白居易の後は「紅葉」と表現されることが多くなつた。色彩的な好みの変遷が窺える「詩語」である。

【通 釈】

美人が居たときは、この座敷も花が満ち溢れているかのようにであつたのに、美人が去つてしまつた後は、人気がない寝台を空しく余しているばかりである。

今に至つて、三年の月日がたつたのに、なお部屋には名残の香りが漂っている。

香りは減することなく、あの人があたたび戻つてくることはない。

君を思えば、黄葉は散り行き、白露は青い苔を潤している。

0 其十二

1 愛君芙蓉嬋娟之艷色

其の十二に
君が芙蓉嬋娟の艷色を愛す

2 若可冷兮難再得

冷すべきが若く再得難し

3 憐君冰玉清迥之明心

君が冰玉清迥の明心を憐れ

4 情不極兮意已深

情極まらず意已に深し

5 朝共琅玕之綺食

朝には琅玕の綺食を共にし

6 夜同鴛鴦之錦衾

夜には鴛鴦の錦衾を同じくす

7 恩情婉嬾忽爲別

恩情の婉嬾忽ち別れを為し

8 使人莫錯亂愁心

人をして愁心に錯亂すること莫からしめよ

9 亂愁心

愁心に乱るれば

10 涕如雪

涕は雪の如し

11 寒燈厭夢魂欲絶

寒燈 夢を厭ひて魂絶えんと欲し

12 覺來相思生白髮

覺め来たつて相思 白髮を生ず

13 盈盈漢水若可越

盈盈たる漢水 越ゆべきが若きも

14 可惜凌波步羅鞵

惜むべし 波を凌いで羅鞵に歩す

15 美人美人兮歸去來

美人美人 婦りなんいざ

16 莫作朝雲暮雨兮飛陽臺

朝雲暮雨と作つて陽臺に飛

ぶこと莫からん

【校 語】

2若 【王琦本】は「蕭本作『色』」と注する。【分類補

注本】「全唐詩」は「色」に作る。

3氷 【宋本】「李詩通」「全唐詩」は「餐」に作る。

7婉變 【李詩通】は「氷」に作る。

14鞵 【宋本】「咸淳本」「李詩通」は「襪」に作る。

16暮雨兮 【王琦本】は「繆本缺『暮雨兮』三字」と注

する。【宋本】はこの三字がない。【咸淳本】もこの

三字がないが、注によって補っている。

【詩型・韻字】

長短句〔雜言〕古詩。色・得〔職韻〕心・深・衾・心
〔侵韻〕雪・絶〔屑韻〕髮・越・鞵〔月韻〕來・臺〔灰
韻〕

【語 釈】

0其十二 この詩も男から女へ寄せるという設定。但し、

安旗主編「李白全集編年注釈」は「此ノ詩白ノ在ル」

長安ニ時期ニ贈ル内ニ之作、其ノ中「憐君」二句、「盈

盈」二句、「美人」二句、擬スルニ爲リ許氏之語」と

と注する。「寄遠十二首」全体としては、男の一人

称計七首、女の一人称計五首。うち「其四」は、女

の一人称として解釈したが、男の一人称とも考えら

れる。この詩は、詩中に「兮」字を多く含むことか

らもわかるように、楚辭調（辭賦体）で書かれてい

る。

1芙蓉 女性の顔の美しさを言う。【西京雜記】卷二に

「卓」文君姣好、眉色如レ望遠山、臉際常ニ

若シ芙蓉」とある。

嬋娟 女性の美しさを言う疊韻の語。【広韻】「仙韻」

に「嬋娟、好貌」とある。

2可澹 「澹」は「餐」に同じ。食べてしまいたくなる

ほど美しい。特に女性の肌を言う。西晋の陸機「日出東南隅行」(『文選』卷二八)に「鮮膚一何ソ潤ナル、秀色若レシキガ餐ス」とある。

3 憐君 安旗主編『李白全集編年注釈』は、これ以下の二句を、許氏から李白への言葉とするが、取らない。「冰玉清迥之明心」の語は、女性の愛する男への節操の堅さと判断されるため、「君」は男性でなく、女性を指すと考えるほうが自然であろう。

冰玉清迥之明心 「冰玉」は心を喩える。水の玉のように澄みきった心ということで、女性の男性に対する変わらぬ貞節の比喩として用いられる。類似表現としては、南朝・宋の鮑照「代白頭吟」(『文選』卷二八)にある「直キコト如ク朱糸ノ繩ノ、清キコト如玉壺ノ冰ノ」が挙げられる。これも女性の節操の堅さを言っている。「迥」は遙かなさま。「清迥」で、どこまでも清らかなこと。鮑照の「舞鶴賦」(『文選』卷一四)に「抱ク清迥之明心ヲ」とある。

5 琅玕之綺食 「琅玕」とは、『淮南子』「墜形篇」等に見える崑崙山に生えるという「琅玕樹」のこと。その実は仙界の美味な果実として知られる。三国魏の阮籍「詠懷詩、其四十三」に「朝ニ餐ス琅玕ノ實、夕ニ宿ス丹山ノ際」とある。「綺食」は、豪華で美し

い食物。

6 鴛鴦之錦衾 鴛鴦の縫い通りのある錦の掛け布団。「衾」は夜具の意。『西京雜記』卷一に、趙飛燕の妹が趙飛燕に贈った品物として、「鴛鴦繡、鴛鴦被、鴛鴦褥」等が挙げられている。また、初唐の陳子昂「鴛鴦篇」(『全唐詩』卷八三)に「聞ク有ニルヲ鴛鴦ノ綺一復ッ有ニ鴛鴦ノ衾」とある。

7 婉嬖 本来、女性の美しさを言う疊韻の語。「韻会」に「婉嬖、美好也」とある。ここでは女性そのものを指している。

10 涕如雪 見慣れない表現。涙を雨に喩える表現は多いが、ここは韻字の関係で「雪」としたか。あるいは「雪ぐ」の意で、動詞と解釈すべきか。待考。

13 盈盈漢水 「盈盈」は満ち溢れる様。「漢水」は「天の川」「銀河」。この二句は牽牛・織女の七夕伝説を踏まえる。表現としては、七夕を歌ったものとして著名な「古詩十九首」の「迢迢牽牛星」(『文選』卷二九)の「盈盈タリ一水ノ間、脉脉トシテレ得レ語ルヲ」を踏まえる。なお、安旗主編『李白全集編年注釈』は、これ以下の四句を、許氏から李白への言葉と解するが、取らない。

14 凌波羅鞞 うすぎぬの足袋で波を越えて歩いて行く。

三国魏の曹植「洛神賦」(「文選」卷一九)の「陵レレレト
(五臣注は「凌」に作る)波ヲ微歩スレバ、羅韞生レズ
塵ヲ」とあるのを踏まえる。「羅韞(襪)」は、普通、
女性が履くものとして詩に登場する。例えば、李白
の「玉階怨」に「玉階生ジ白露、夜久シウシテ侵ス
羅襪ヲ」とある。

15 歸去來「さあ、帰ろう」という意。「去來」は通説で
は語調を整える助字。陶淵明の「歸去來兮辞」の表
現を踏まえる。

16 朝雲暮雨兮飛陽臺 楚王と巫山の女神の、いわゆる「巫
山雲雨」の故事を踏まえる(「其四」の語釈を参照)。
ここでは、巫山の女神が、陽台のもとで朝には雲と
なり暮れには雨となり、楚王の前に現われると語つ
た言葉転用している。ただ、この末尾二句は難解。
久保天随は「美人、美人、いざさらば、立ち去るも
善からうが、朝雲となり、暮雨となり、かの陽台の
下に飛んで、楚王と、あらぬ浮名を流す様なことが
あつては成らぬ。」と訳し、大野実之助もほぼ同様で、
末尾を「みだりに愛情にうつつを抜かすようなこと
があつてはならぬ。」と解釈する。要するに、両者
とも妻の第三者との浮気を戒めているものと解釈し
ている。しかし、この詩の第三句目に「憐君冰玉清

迴之明心」と、妻の節操の堅さを誉め讃えている部
分もあるので、この解釈では釈然としない。ここは、
「美人(妻を指す)よ、私は必ず近いうちに帰って
くるから、君が雲雨になってしまい、二人が雲雨(人
間でないもの)と人間といった、遠い別々の世界の
存在となってしまうこともない。生身の人間どうし
として愛し合うことができるのだ」とといった方向で
解釈したい。ちなみに第十一句目の「夢」も、この
最後の二句の伏線になっており、ここでは楚王と女
神のように夢の中でしか愛し合うことができないこ
とを暗示している。だからこそ、末尾二句は、現実
世界での生身の出会いを語っていると考えるほう
が、自然の流れとは言えまいか。いずれにせよ検討
を要する句である。

【通 釈】

私は、君のその芙蓉のように美しい艶やかさを愛して
いる。その美貌は食べてしまいたくもなり、二度と得ら
れるものではない。

私はまた、君のその氷の玉のように澄んだ高潔な心を
いとおしく思う。極まることのない情け、深い深い思

かつては、朝には仙界の食べ物のように美味な食事を共にし、夜には鴛鴦の刺繍をした錦の衾を共にした。

恩情をかけた美しい君と、ある日突然別れてしまったが、私の心を愁いで掻き乱さないでおくれ。

私の心は、愁いで乱れると、涙が雪のように、はらはらと流れ落ちてしまう。

寒々としたともしびの中、夢も見飽きて、魂は断ち切れそうになる。目覚めれば、君を思つて、髪の毛も白くなる。

満々と水をたたえる天の川も、渡ろうと思えば渡れるが、(私の方から渡つて行こう。なぜなら、)君が波を越えようとしたら、君のうすぎぬの足袋は濡れてしまうだろう(から)。それはあまりに惜しまれる。

美人よ、美人、君のもとへ帰つて行こう。もう、夢の中でしか会えない、うつつには雨や雲となつて陽台にでしか会えない、などといった楚王と巫山の女神のような悲劇は繰り返すまい。